



四万十川に行きませんか？という一本のメールを貰ったのは三月の最後だった。

私は少し笑ってしまった。いや四万十川にお住まいの皆さんには何も関係はない。昔、うちの劇団員のN君が稽古中にもかかわらず「彼女と四万十川に行くので、休ませてください」と言い放ったことがあり、劇団中が騒然となった事件があったのだ。

その時に私は初めて「四万十川」という言葉を認識した。N君は今ではうちの看板俳優だ。若手が稽古を休むと言い出したら、火がついたように怒る先輩のひとりでもある。人間は成長するらしい。(笑)

そんな出会いだったが、実際に四万十川に行く機会もなく十数年が過ぎていた。しかし、夏は海より山主義の私にとってはとても気になる場所でもあった。

# 清流の人々よー！

— 四万十川流域を訪ねて





▶ 四万十川財団の  
矢野由美子さん



▼ 太平洋に面した黒潮町は古くからカツオの一本釣りが盛ん。黒潮一番館では修学旅行生たちがカツオのタキづくりに挑戦中



▼ 潮風が心地よい黒潮町の砂浜。5月上旬には「砂浜美術館」としてTシャツアート展が開かれる

高知県西部を蛇行しながら太平洋に注ぐ、日本最後の清流・四万十川。全長196kmの流域に約8万人が暮らす。2001年高知県は、流域5市町（津野町・梶原町・中土佐町・四万十町・四万十市）を対象に、四万十川流域の自然環境や風景、生活文化を保全することで地域振興を図ろうと、「四万十川条例」を制定。「保全と振興」に努めている。



▲ 四万十市地球環境課の芝正司さん(写真中)と長岡崇文さん(左)



◀ ▲ 高知県環境共生課の東谷興正さん(写真上)、西村哲也さん(左)に話を聞く



▲ 四万十川財団の筒井幹人さん



### 空気の匂いが違う

さて、一本のメールに即返信し、私はやっと四万十川に辿り着いた。まず高知龍馬空港に着いた瞬間から「おお、なんといい匂い！」と空気の美味しさに感動した。高知の人が「このへんがですか？へえ」と言ったが、大阪から行った者にはすでに異次元の薫りだった。

空港から四万十町へ移動し、四万十川財団に伺う。この財団は、高知県と流域五市町（津野町・梶原町・中土佐町・四万十町・四万十市）が共同で設立したものだとか。財団の一室で、高知県環境共生課の東谷興正さんと西村哲也さん、財団の筒井幹人さんと矢野由美子さんに四万十川周辺の歴史や、取り組みを聞かせてもらう。

もともとは一九八三年にNHKで放送された特集「土佐・四万十川 清流と魚と人」という番組が火付け役で全国に名前が知れたこと。それがブームになり、観光客が訪れるようになり、自分たちの住んでいる川の周辺がたいへん貴重な自然環境であり文化的景観であるという、生態系と景観の保全に取り組み出したこと。

行政だけではできないことを川の周辺に住む住民たちと協力してやっていることなども説明を受けた。それも本当に生活の小さなことから。粉石けんを配るとか、三角コーナーを設置するとか、日々の生活の中から清流を守ることに取り組んでいるのだなと感心させられた。

### 保全と振興と

その説明の最初に、東谷さんが「四万十川は『最後の清流』って言われています。ま、自ら言っているのか、言われているのか知りませんが」とくったくなく笑った。

四万十川を代表する景観の背後林を他県の業者が買い取り、伐採する計画が持ち上がったので、財団が管理運用している四万十川基金の一部でその山を保全することにしたらしいのだが、「そんな、文化的景観やねんからモラルの問題ですよ？」と私が言うと「それがなかなかねえ。向こうは四万十川で食ってるわけやないですし」と、その場に居た人たちが苦笑いをした。

普通は「我が県は…」などと高飛車に説明が始まり、他県に対するクレームなども自分たちの正当化だけになるものだが、土佐の人は陽気で正直だった。私はその雰囲気ですっかり取材の硬さが取れたような気がした。

その後、四万十市地球環境課にもお邪魔する。そこで芝正司さんと長岡崇文さんから「四万十市は保全と振興という矛盾したものの間に立って、取り組みをしないとイケない」という言葉を聞かされ、ドキリとした。確かに四万十川を守るだけならまだいいが、それを世間の人に知ってもらい、商売にもつなぐことは逆に自然を壊す





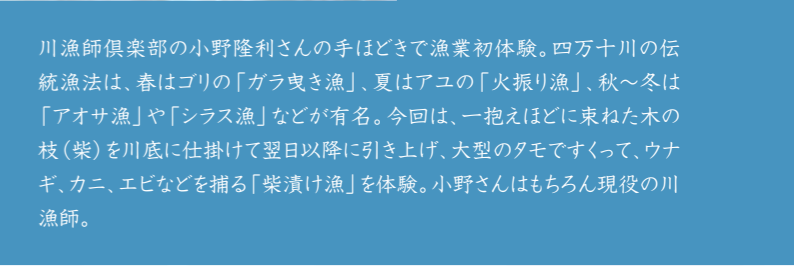
▼「しゃえんじり」メンバーの平塚聖子さん



人と自然が共生するモデル地区・黒尊川流域。黒尊川は「平成の名水百選」にも選ばれた水質で、流域の人々は住民グループ「しまんと黒尊むら」をつくり、自然に優しい人々の暮らしがあることで守られる自然が増え、結果的に地域の発展につながっていくという考えを実践。山菜など地元食材を使ったメニューを提供する農家レストラン「しゃえんじり」(野菜畑)の運営なども行っている。



▲伝統漁法である「投網漁」  
▶川エビやウナギの稚魚、ゴリなど



川漁師倶楽部の小野隆利さんの手ほどきで漁業初体験。四万十川の伝統漁法は、春はゴリの「ガラ曳き漁」、夏はアユの「火振り漁」、秋～冬は「アオサ漁」や「シラス漁」などが有名。今回は、一抱えほどに束ねた木の枝(柴)を川底に仕掛けて翌日以降に引き上げ、大型のタモですくって、ウナギ、カニ、エビなどを捕る「柴漬け漁」を体験。小野さんはもちろん現役の川漁師。

という矛盾にもつながる。世界中の観光地で同じ問題が繰り返されているのだろうと改めて思う。  
地元の人たちは川と共に生き続けなくてはならない。しかし「点」でしか関わらない我々は単に知りたいという欲望で関わるだけだ。その間の溝は何で埋まるのか？  
旅好きの私には胸の痛い一言だった。

### 川漁師が働く川

アユ、ウナギ、テナガエビ、ツガニ……四万十川には二百種類もの魚類や水生生物が生息していて、今や日本で珍しい川漁師さんたちが活躍している。

午後からは体験漁業をさせてもらった。まさしく生まれて初めての体験。私はこの歳になるまで釣りをしたことはない。まして小船の櫓をこいだり、伝統漁法である柴漬け漁のお手伝いなんてまったくの素人だ。

しかし、船の上で大きな網を持って「今、すくって！引き上げて！」と言われて「はい！」などと動き回っているうちにハッと気がついた。この取材の前回までの掲載誌を参考に見せてもらっていたが、みんな素敵な景観をバックに写真を撮っているだけだったような気がする。後で担当の編集者に「この取材って、こういうフィジカルなこといつもするんですか？」と尋ねると「いいえ、わかざさんなら、お願いしてもいいかなと思って」と笑って答えられた。「おーい！ちょっと待て」とツツコミを入れそうになったが、どういわけか私はいつもこう

いう肉体的な体験をする羽目になるようだ。

頑張って体験した漁。その収穫を見たときに、お土産物屋さんで売っている川エビの佃煮などがいかに大変な作業で売られてるか実感する。「もっと高くてもいい！」と叫びそうになった。

そういえば四万十川財団は、川の水質調査や一斉清掃、地元産品の販売を支援する「四万十ブランド認証」、流域ボランティア「リバーマスター育成」にも取り組んでいると聞いた。私たちが癒される景色や自然の恵みの裏側に、地元の人の地道な働きがあることを改めて思う。

### 人と自然の共生モデル

次の日はあいにくの雨。しかし、四万十川の支流の中でも最も美しいといわれる黒尊川周辺にも出向く。みんなはあいにくの雨と嘆いたが、私はご機嫌だった。雨に洗われた緑のなんと素晴らしい薫り。川の流れが少し速く濁っていたが、その荒々しさも生きている姿を映し出して忘れられない光景だった。

この黒尊川流域の五地区が集まって「しまんと黒尊むら」という、自然環境を守りつつ、振興にも力を入れている地区がある。春から秋には自然を楽しみながら体験できる施設も充実しているので、今度はぜひ個人旅行で行きたいものだ。レストラン「しゃえんじり」で食べた山菜の美味だったこと！ つい、近くの直販所でイタドリを買って帰り、大阪でも料理したほどだった。





増水時に水面下に沈む「沈下橋」。欄干がないのは、増水時に流木や土砂が橋に引っかかり、橋が壊れることを防ぐため。戦後、特に1960年代以降、数多くつくられ、現在も住民の生活道として活躍。1998年、高知県は現存する47の沈下橋を重点的に保存・維持管理する方針を決定した。沈下橋は水面までの距離が近く、夏には橋から川に飛び込んで遊ぶ子供たちも多いとか。



◀▲「四万十川の沈下橋」  
としてメディアに登場すること  
も多い「岩間大橋(岩間  
沈下橋)」

▲歩行者と2輪車だけが通行できる「中半家(なかはげ)橋」



### 「沈下橋」という景観

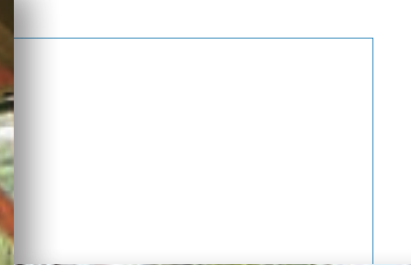
ところで、四万十川にはたくさん「沈下橋」と呼ばれる橋が架かっている。有名な写真も多いのでご存じの方も多いただろう。増水時に水面下に沈むことを想定したもので、いずれも欄干がなく、細い橋を車で渡るとスリル満点。この沈下橋も、かつてお金のなかつた時代に仕方なくこういう簡素な形で架けられたそうだが、川の景観に似合ったその姿のせいで有名になってしまい、今も守られているという。土地の人にとっては、欄干のある安全な橋の方がいいに決まっているのだ。夏にはキャンプに来ていた子供たちが沈下橋から飛び込んだりして遊ぶので、土地の人は橋を渡りたいが、待っていてくれたりするらしい。

「保全と振興か……」と私はまた頭の隅にその言葉を思い浮かべた。

### 土地の人の努力と外の人の礼儀

今回の取材の中で、四万十市教育委員会の川村慎也さんにも会った。初日、二日目と、彼は自分の説明する地域の地図をコピーして持ってきてくれ、四万十川周辺がかつて林業が盛んで、川を通して関西へ薪炭などを積み出していたこと。その町の名残りがどこにあるかなどを、





まさに「生物多様性の宝庫」のような四万十川流域の保全と振興の取り組みを辿り、多くの人と出会った。害獣を有効活用して特産品に——「鹿ジャーキー」を開発した「しまんのもり組合」の岡村有人さん(写真上)。リバーマスターの麻田満良さん(写真左)。「四万十川が日本一なのは、川の透明度だけでなく生き物がたくさん住んでいるからだ」と言う、四万十川西部漁業協同組合「鮎市場」の林大介さん(写真下)。



あっという間に、簡単な言葉で面白く説明してくれた。古地図好き、歴史好きの私にはたまらない時間でもあった。

しかも川村さんは大阪出身だという。お母さんの実家が高知だったので、ハマッて四万十市で就職したらしいなるほど、だから外からの視線で説明できるわけだ。ああいう青年が縁あって住み着く。四万十川の魅力はなかなか奥行きが深いとみた。さすが国の重要文化的景観の選定を受けただけのことはある。

さて、たった二日で私に何が取材できたかはわからないが、四万十川に行く前と行った後では印象は大いに違うものになった。

最後に最も印象的だったのは四万十川の周辺で川についてのレクチャーや環境保全のアドバイスなどを行う流域ボランティア、リバーマスターの麻田満良さんの話。「わしらは別にそんな名前で呼んでもらわなくても、今までも同じことをしとったし、これからもするよ。川の側に住んでるから」とのこと。また「都会から来た人に教えるのは当たり前。ここの人はお人よしばかりやからね」とも言った。

四万十川と共存する人々にとっての現実は一層厳しくて優しい。そこに分け入る我々はどうなのだろうか？

毎年、苗場で行われるフジロックという音楽祭がある。山の中でロックを楽しむ日本最大のイベント。何よりも有名で長続きしている理由は都会から行くお客が一切ゴ





▼雨で増水した四万十川。沈下橋はすっかり沈んでしまった



▶このぼりの川渡し



わかぎるふ、  
一九五九年大阪市生まれ。二つの劇団「リリパットアミーⅡ」と「ラックシステム」を主宰、座長。作、演出、美術、出演を行う。ほかにエッセイ、小説、テレビの脚本など多方面で活躍。新作狂言にも挑戦。二〇一〇年より新神戸オリエンタル劇場芸術監督も務める。著書『大阪人、地球に迷う』『大阪の神々』『大阪弁の秘密』『より道体質』『秘密の花園』『太りすぎの雲』『それは言わない約束でしょう』など多数。  
<http://homepages3.nifty.com/tama-sho/>

ミを出さないという初年度のボランティアスピリッツが生かされているからだ。  
大阪に戻る前に、雨のせいで川に沈下した橋を見ることのできた。向こう岸にはまさしく渡れない。川向こうに住む人はあの日、どうしたのだろうか？ そんな犠牲の上で我々が文化的景観を愛でていることは確かだ。  
美しいものを守ってくれる土地の努力と、それを見せてもらおう外部の人間の礼儀のバランスを忘れてはならない。  
**躍**